

情報 INFORMATION のまど

AIイベント情報

もっとゆたかに

「障がいの社会モデル」をいかして 人権が尊重される社会へ

「障がいは個人にあり、個人の工夫や努力、治療などによってその障壁（バリア）を解決すべきものである」という考え方を、「障がいの個人モデル」といいます。しかし、個人の努力には限界があり、解決できない問題もあります。また、障がいのある人にだけ、解決の責任を負わせることになります。

それに対して、「障がいは社会の側にある障壁（バリア）のことであり、社会の側の工夫や努力、仕組みを変えることなどによって解決すべきものである」という考え方を、「障がいの社会モデル」といいます。例えば、今では「だれでもトイレ（バリアフリートイレ）」が多くの公共施設や商業施設で設置されるようになっていきます。このように、障がいのある人が我慢したり、勇気を出したりしなくても、安心して外出ができるよう環境が整えられるようになってきました。

身近にできることは、障がいのある人が、社会にある「バリア」によって生じている困りごとに気づくことです。そのためには、声をかけるなどのコミュニケーションを通して、何に困っているのかを知ろうとする姿勢が大切です。困りごとが分かれば、自分のできる範囲で行動に移していきましょう。そうすることで、お互いのことを深く理解でき、心理的なバリアも取り除く（心のバリアフリー）ことにつながります。このような行動の先に、誰もがお互いの人権や尊厳を大切に、支えあい、生き生きとした人生を送れる社会が実現できるのではないのでしょうか。